

〔書評〕

杉本つとむ著

『日本翻訳語史の研究』

杉本つとむ氏は先年、大著『^{時代}江戸蘭語学の成立とその展開 I-V』を刊行された。本書はそのエッセンスともいえるもので、十六世紀から十九世紀の間のヨーロッパ語翻訳の問題に焦点をあてたものである。

江戸時代の国語研究は、国語史の分野ではもつとも遅れており、蘭学については医学史・科学史の立場からの断片的な考察以外は、ほとんど行われていなかった。この未開拓の分野を語学の立場から体系的に考察されたのが杉本つとむ氏であり、その成果が全五巻の大著なのである。ただ、その中心は書誌学的であり、蘭学者の紹介と著書の考察であった。未発見の文献・写本の発掘は枚挙にいとまがなく、江戸時代の言語生活、学問の実態を刻明に記述し、今後の江戸時代語研究の方向を一変するものであった。しかし、蘭語学という名称からか、国語学の分野からはあまり注目されなかったかに見える。

今回の『日本翻訳語史の研究』は、その成果の上に立つて、翻訳について考察されたもので、江戸時代の翻訳語研究のための体系的展望と視点とを与えるものとして、画期的なものといえよう。ただ

し、翻訳語という書名から、語史研究と考える人もあろうかと思う。評者自身、訳語の語史的研究だと思いついていたのであるから。その意味において、本書の書名は、「江戸時代翻訳語史の研究」とあるべきではなかったかと思う。しかし、本書で考察された翻訳語史は、今後の翻訳語の研究に不可欠の視点を論じている。

本書の内容は次の通りである。

序論 十六〜十九世紀、翻訳文化の背景

第一部 翻訳語の方法と史的展望

第一章 オランダ語の学習と翻訳

第二章 長崎通詞と翻訳

第三章 蘭日対訳辞典『ドゥーフ・ハルマ』の成立と流伝

第四章 近代翻訳語の成立と展開

第II部 訳語・訳詩の背景と条件

第一章 本邦初訳「眼科新書」翻訳事情

第二章 西欧詩歌の翻訳・創作と新体詩の源流——比較文学の芽生え

第三章 鎖国と西欧ヒューマニズムの発見——貧院・幼院・病院の翻

飛 田 良 文

第四章 〈人稱〉の発見ととまどい——ヨーロッパの個人主義を翻訳する——

第五章 ケルキの鼠とヨーロッパ精神——格言・諺言・諺と翻訳——

第六章 ヨーロッパ文字「漂荒紀事」(ロビンソン・クルーソー)の冒

険)の翻訳

第七章 鎖国と詩歌・訳詩への断想——蘭詩翻訳への環境と条件——

第八章 〈蘭学事始〉とその問題点

第III部 西欧文化・科学の摂取と人的要素

第一章 医聖ヒツポクラテス・ソクラテスと秘伝書——西欧の医

術・思想の受容——

第二章 中野柳圃と翻訳・蘭語の研究

第三章 大槻玄沢と戯作「医者あき人」——蘭医の虚像と実像——

第四章 適塾の人間教育と明治啓蒙思想の原点——緒方洪庵と西欧

医学思想の翻訳

第五章 「医戒」の翻訳と医の倫理——杉田成勲と西欧医学思想——

第六章 橋本左内と外国語の学習

第七章 明治における洋学と漢学——四外と浪石と外国語——

余論 オランダにおける日本学の伝統と史的展開

このように本書の構成は、蘭学の受容とオランダの日本語学から

なり、前者は総論にあたる序論と第I部、各論にあたる第II部と第

III部からなる。第II部は分野別に、第III部は人物別になっている。

したがって重複する部分があるが、やむをえないことである。

序論では、「翻訳とは異なる言語間の置換である」(一八八)と定義し、通事の事は単なることばの置換作業ではないから、「人と接す

るといふ点では、人柄はもちろん、外観からスタイルまで好ましいことが要望される」として、「延喜式」十八式部の

凡渤海訳語生者、簡学生容貌端正者二人一充、応得_レ其業_一者、預_二得考_一之例_一

を紹介している。なんでもないことのようにあつて、人間社会の問題点を指摘している。

さて、本書の対象とする横文字といわれるヨーロッパ語の翻訳については、以下の六項の視点を明確にした。

第一には、南蛮文化と紅毛文化とを区別した。

日本人がヨーロッパ語とはじめて接するようになったのは十六

世紀、吉利支丹 Christiao すなわち、ポルトガル語を主とするイ

スパニア語・イタリア語・ラテン語を話す人たちとである。彼

らのことばは別に〈南蛮語(口)〉ともいわれるが、内容はいう

までもなく、カトリック教の布教にともなう西洋文化である。

(中略)基本となるべき布教の具、日本語は吉利支丹が学び、翻

訳も吉利支丹によつておこなわれたわけである。(南蛮文化)は

日本人が創造したものではなく、南蛮人—吉利支丹によつて、

つくりあげられた文化である。そういう意味で日本人は受身で

西洋文化を学びとつたにすぎぬといつてよからう。(一八一—一九

二)

と述べているが、これが南蛮文化の本質であり、紅毛文化(蘭学)の

日本人の積極的学習と基本的に相違するところである。

第二には、日本の吉利支丹と中国の耶穌会士との混合を指摘した。確かに中国での耶穌会士編集の書—中国語で書かれている点、

漢文に準ずるものであるから、日本人には有効であったが、日本に舶載されていたことが、日本人に大いなる福音をもたらしたことも事実である。それを短絡的に、日本での南蛮学統の伝統に結びつけて論じることは誤りである。私見ではこの種のもが日本に影響を与えたとしても、ほぼ十八世紀後半以降であつて、蘭字の土台がほとんど固まつてからと思う。(中略) 舶載された(西洋明人)(新井白石は「明儒」と呼んでいる)の著書が鎖国下の日本に与えた影響と、伝統的な日本の吉利支丹とは峻別されるべきである。(二二二)

この指摘は、翻訳語研究の背景として、重視しなければならない。ただ問題は、中国耶穌会士編述の書の影響が、十八世紀後半以降という点であるが、これら西洋明人の著書は原則として禁書であり、享保五年(一七二〇)の異学の禁がゆるむまで、入手が困難であつたことを考えれば妥当なところかとは思ふが、なお検討が必要であらう。

また杉本つとむ氏は、その影響を「日本人に大いなる福音をもたらしたことも事実である」と消極的な発言をしているが、私は、この西洋明人・清人の漢訳洋書の内容こそ、明治の近代化をささえた源流であり、現代日本語彙の源流でもあると考えている。詳細は「西洋文化の移入と新漢語」(『月刊国語教育』昭和六年九月号)を参照されたい。漢訳洋書は蘭訳書よりも多く、積極的に研究すべき対象である。その西洋明人・清人は佐藤亨氏によれば九〇〇人ともいわれ、その出身国は、次のように、世界各国にわたっている。たとえば、

十六世紀〜十七世紀

利瑪竇 (Matthaeus Ricci・イタリア)

艾儒略 (Julius Aleni・イタリア)

孟三德 (Eduard Sande・ポルトガル)

湯若望 (Joannes Adam Schall Von Bell・ドイツ)

熊三拔 (Sabbathino de Ursis・イタリア)

鄧玉函 (Jean Terrenz・スイス)

羅雅各 (Giacomo Rho・イタリア)

龐迪我 (Didaco de Pantoja・スペイン)

十七〜十八世紀

南懷仁 (Ferdinand Verbiest・ベルギー)

戴進賢 (Ignatius Koegler・ドイツ)

張誠 (Gerbillon Jean François・フランス)

穆尼閣 (Joannes Nicolas Smogoleski・ポーランド)

白晉 (Bouvet Joachim・フランス)

十九世紀

丁韜良 (Martin William Alexander Parsons・アメリカ)

花之安 (Faber Ernst・ドイツ)

偉烈亞力 (Wylie Alexander・イギリス)

裨治文 (Bridgman Elisha Colemah・アメリカ)

瑪高崙 (Mac Gowan, Daniel Jerome・イタリア)

慕維廉 (Muirhead William・イギリス)

衛三畏 (Williams Samuel Wells・アメリカ)

などの宣教師が西洋文明を中国語に訳したのである。それらは輸入されたばかりでなく、そのうちの主要なものは、日本でも和刻された。長沢規矩也著『和刻本漢籍目録』によって詳細を知ることがで

きる。

第三には、蘭学が、長崎通詞からはじまり、長崎に遊学した全国各地の学徒によって一般化する過程を明らかにした。

まず長崎から江戸へと蘭学が推移し、十八世紀後半〜十九世紀初頭にかけて、江戸が蘭学を中心となつて、つぎつぎに翻訳がおこなわれ（中略）さらには、京都・大阪に蘭学が移植されて、関西にも蘭学が隆盛になる。十九世紀半ばまでには、蘭学は日本全国にひろがるのである。（二一四〜）

また、蘭書が原本はドイツ語・英語・フランス語の重訳であったり、対象となる学問も「医学を主として幕末の兵学に及ぶ」限定されたものであった。

第四には、江戸時代の翻訳の評価についての指摘である。

江戸時代の翻訳を考える時、是非つけ加えておかねばならないのは、これまで、どちらかという江戸時代の翻訳が、表面的な技術的なものを摂取したにとどまると解することである。（中略）誤つた評価であつて、冷静、客観的にも記録をたどつていくならば、蘭学者たちがいかにヨーロッパの精神文化を尊重し、これを学ぶことに努力したかということがわかる。（二一五〜）

杉本氏は、「翻訳は語学ではない」（二五九〜）といわれるが、まさにその通りで、ヨーロッパ精神の受容と尊重が、本書の中心テーマとなつている。

第五に注目すべきことは、翻訳という行動と翻訳という用語とを区別して検討したことである。たとえば、『阿蘭陀通詞由緒書』の二代目「西吉兵衛」の条を引用し、

敵有院様御代承応二年父跡職被仰付大通詞罷成明暦二年南蛮文字之天文書和解被仰付右文字ヲ読長崎儒者向井玄松和字ヲ以写之乾坤辨説ト申倭書ニ翻訳仕差上申候

とある「乾坤辨説」の翻訳を検討した。同書の例言にあたる条項には、

一、忠庵が草稿は、蛮字を以て倭語を書す。忠庵は蛮人也と云へども、日本に住する事四十年に及び、故に能く倭語に通じ、太平記等の書を読習へり、是を以て蛮書を訳する時、倭語を用ゆと云へども、其書写に至ては倭字に不能也、是故に蛮字を用たり、今西吉兵衛をして、原本の蛮字を讀て、予（向井玄松）倭字を以て写し之とあることから、

これを読むと、忠庵（ポルトガル人、日本に帰化した）は〈蛮書〉を訳したのであるが、西は〈蛮字〉を日本文字になおすために読んだということで、現代流にいえば、ローマ字文の日本語を日本文字の文（漢字仮名まじり文）に改めたことで、〈翻訳〉といわれるものである。（二七六〜）

という事実を紹介した。このような、ローマ字書きの日本語を漢字仮名交り文になおすことも「翻訳」又は「訳す」ということも特殊ではないようだと言へ、他にも例をあげている。

私も、かつて「訳語研究の視点」（国語学一一五集）に、『解体新書』がオランダ語→日本文→漢文の手順をふんで訳されたことを指摘したが、「翻訳」という行為は、今日と異なる点が多い。

蘭詩の翻訳についても、大槻玄幹の「蘭園日渉」を引用して、

此蘭詩ハ今茲庚午ノ春入貢ノ甲必丹ドクフト云者録ニ其旧作ヲ贈ル所也今其義ヲ国雅ト漢詩トニ翻シ四海同情ノ趣ヲ述但シ蘭詩ヲ釈スル法ハ嘗テ柳圃先生ヨリ口授スル所ニシテ私ノ発明ニアラス(一八九六)

と述べた文を紹介している。蘭詩も、「まず直訳したのちに、(国雅(大和歌にひるがえす)と、(漢詩)に翻訳する」(一九一〇)のが、江戸時代の翻訳という行為であった。

第六には、翻訳家の誕生を明らかにした。

十八世紀後半にはいると、(翻訳)の語は一般化している。しかし翻訳の主体者は、長崎通詞か医師であつて、現代のような(翻訳)専門の翻訳家はまだ出現していない。そういう点で翻訳家と目されたのは、江戸においては宇田川玄真(榛齋・璣、一七六九—一八三四)であろう。(中略)しかし社会的にはつきりと翻訳家として明示されるようになったのは十九世紀前半、ちようど『重訂解体新書』が刊行されたころと思われる。たとえば人名録の一種、『海内医林伝』(文政十一年・一八二八)刊に、つぎの記事がみられるのである。

兵庫 西洋翻訳字 藤田佐五郎

また伊佐治縫之助・藤原重光編「天保医鑑」(弘化三年・一八四六)にも(西洋)翻訳家 善詩文画和歌 小森宗二 西洋翻訳家 美濃大垣人 室町美川北 宮本元甫などが見える。こうした人名録や医鑑に明示されている(後略)(三一六)

これらの視点は、杉本つとむ氏によって明らかにされた。

第一部は、日本人のオランダ語学習と研究史であつて、大著『江戸蘭語学の成立とその展開』で明らかにした内容を要約したものといえよう。

第一章では、通詞と江戸の蘭学者との二種類の語学学習方式を紹介する。第二章は長崎通詞の翻訳を、医学・天文学・辞書の順で述べ、英・仏・魯語の学習へと概説する。第三章は蘭日対訳辞典の成立について述べ、注で、蘭日・日蘭対訳語彙集の一覧表を示している。第四章は、江戸の蘭学者によつて翻訳され刊行された訳書を列挙し、医学・物理学・化学・植物学・天文学の順で、その用語を検討している。また、蘭文典、覆刻・翻訳蘭文典を紹介(二二六)しており、便利である。

第二部は「訳語・訳詩の背景と条件」とあるように、翻訳という行動の背景にあるもの、翻訳者の心理、誤訳の原因など、西洋文化の導入にともなうジャンルごとの問題を解明している。

第一章は大槻玄沢の『解悶雜記』から、本邦初訳の『眼科新書』をめぐつて、原書の入手法、師弟の確執といった裏面を明らかにしたもので、杉本氏の心情もふくめて研究者の心理を率直に吐露しており、思わず釣りこまれてしまう迫力がある。また、芝蘭堂の教育、蘭人参府のさいの宿舎長崎屋での対談など、見逃せない記事がある。

第二章は、新体詩の源流を明らかにしたもので、近代文学研究者の江戸期の訳詩の説や論は「全面的に否定した方がよからう」(一七三)という力作である。勝海舟の翻訳詩「思ひやつれし君」を例に、ローフ・デン・ヘールにはじまるオランダ語の讚美歌が、どのよう

にして翻訳されたか、誤訳・誤伝された原因を追究し、蘭詩がどのようなにして翻訳されたか、その歴史を明らかにした。

第三章は森島忠良の『紅毛雑話』（天明七）に紹介された貧院・幼院・病院を中心に、ヒューマニズムの精神が導入されるさまを、第四章は、日本最初の蘭文典、宇田川槐園（玄随）の『蘭訳弁髦』（写本・寛政五成立）を紹介した。

第五章は、格言・箴言・諺の翻訳が、ヨーロッパ精神の導入に力のあつたことを述べたユニークな章である。中でも『蘭学階梯』に引用されている「メン、ムート、エーテン、ラム、テ、レーヘン、マール、ニート、レーヘン、ラム、テ、エーテン」は蘭学者の愛読するところで、杉本つとむ氏も英文要旨の終りに引用している。これはオランダ語による勸学のための警句で、原文は *Men moet eten om te leven, maar niet leven om te eten*. 直訳すれば「へんハ食ベルタメニ生キルノデハナク、生キルタメニ食ベネバナラヌ」という意味になり、「人生は目的をもつて生きていくべし」（二五〇ペ）ということになる。

なお、「ドゥーフ・ハルマ」に見える「月に吠へかゝる目上の人に無益に逆ふと云意」を紹介し、萩原朔太郎の『月に吠える』との関連を示唆しているが、これはやはり、シエクスピアの「ジュリアス・シーザー」第四幕第三場にある。

I had rather be a dog, and bay the moon,

Than such a Roman. (僕はそんなローマ人になるくらいなら、むしろ犬になって、月にむかって吠えるほうがまだましだ。)

の *bay the moon* が出典ではないかと思う。意味的には *cry for the moon* ではないかとも思うけれども。

第六章は小説「ロビンソン・クルソーの冒険」の翻訳について述べているが、中に、

「」や「（左側）」（右側）」などの符号は扱った底本のそれを踏襲しているのであろうが、左、右側線は本書で新しくもうけたものかもしれない。（二八六ペ）

と述べている。しかし、この符号は底本のそれを踏襲したのではなく、人名・地名・外国語などに使用する漢文訓読の朱引、あるいは中国における朱引の方法を借用したもので、翻訳文の特色を示すものである。

第七章は、蘭詩翻訳への条件となる和詩（仮名詩）の誕生を述べたもの。

第八章は、長崎通詞と蘭学者の生活実態を解明し、『蘭学事始』の誤りを指摘する。ここで注目されるのは、杉田玄白・前野蘭化らが、自力で『解体新書』を翻訳したのかと疑問を発したことである。

吉雄永章（耕生）による「解体新書」の〈序〉も、翻訳以前から玄白や蘭化が吉雄と接触の密であったこと一千里書致殷勤也」と手紙の交換もあつたらしいも推定させる。ごく短期間に翻訳が完了したというのも、通詞たち複数の人びとによって、訳しにくいところを各個に訳出してもらったからにはかななるまい。（三二四ペ）

さらに、『重訂解体新書』について、

「解体新書」は「重訂解体新書」によって増訂されていくのであるが、（中略）完成刊行が文政九年（二八二六）とあるように、「解体新書」より約半世紀が経過している。玄沢個人の蘭語力というよりも、長崎通詞による「ドゥーフ・ハルマ」など辞典の訳

編整備や、蘭文典の翻訳・記述による蘭語学のいちじるしい進歩のあつた結果や成果をふまえての改訂であつたことを見のがしてはならない。(三二五頁)

と述べている。江戸蘭学者たちの言語生活を明らかにして見える卓見であろう。

第三部は、人物別に翻訳とのかかわりを述べている。第一章は「当流伝記要撮抜書」によって、日本ではじめて阿蘭陀流の医術が開始されるまでの実状と、ヒポクラテスが蘭学者たちに名医と仰がれた事情を明らかにした。

第二章は、中野柳圃(志筑忠雄)の蘭語研究を説明したもので、注目されるのは、鶴峯戊申の「語学新書」(天保四年)によせた田島易清の序を紹介したことである。

同時本居富士谷二公起。而専論_三歌文助辞。繼志築藤林諸氏出。而盛訳_二遠西語書_一。文運既動。語法將_レ振焉(三七七頁)

杉本氏は「まさしく本居宣長や富士谷成章の後を受け継いだ柳圃と位置づけられている」と評価している。語法の面で、歌文助辞から遠西語書へと発展していく様子がよく理解できる。

第三章は、大槻玄沢の人物像を明らかにした異色の章で、玄沢という名前の由来、「蘭学階梯」の成立事情、戯作者としての玄沢、医者_一の生活・収入など、裏面が実におもしろい。

第四章は、緒方洪庵とその塾「適塾」の教育を明らかにしたもので、長与専斎がいうように「元来適塾は医家の塾とは言へ其実蘭書解説の研究所にて諸生には医師に限らず兵学家もあり本草家も舎密家も凡そ当時蘭学を志す程の人は皆この塾に入りて其支度をなす」

(「松香私志」と記されているように、一種の外国語学校であつたという。

第五章は、杉田成卿とベストセラーとなった「医戒」の紹介である。

第六章は、橋本左内とその外国語学習の紹介。

第七章は、鴉外と漱石の外国語学習を比較し、「鴉外は江戸洋学の流れに棹さす徒」、「漱石は英文学という近代の洋学」(四四二頁)という指摘が興味深い。

余論は、オランダにおける日本学を史的に紹介したもので、今日、これ以上のもはない。

本書は、「はしがき」に和蘭学・紅毛学・西洋学・洋学という語の起源を紹介し、「あとがき」に、杉本つとむ氏のオランダ語との出会い、本書誕生の必然性が語られている。その論法からいくと、本書は翻訳語研究の入門書であるから、翻訳語の語史研究が今後、期待されるところである。

(昭和五十八年六月十五日発行 八坂書房刊 A5判 四八八ページ 一三〇〇円)

—— 国立国語研究所言語変化研究部長 ——
(昭和六十二年一月二十六日 受理)